順八草紙

二

遠
1454
9

遠
浦 1454
巻 2

怪談瞋恚海巻之二

よしみちうきき

そのころ人かつ浦うあり竪太まるくもの身うちかれば相模の国三浦とゝろ所へ行て船ども出すく撞て急を

やう江戸へ出ぐ或ときのこの寄遇を見て一船づゝ

してかつるさきまるほどに捉考ども出すく抱て

ゝと留りゝとゝに一度二度ゝ江戸へいでまるまゝ

ふゝむなやゝ月ゝうてうつうゝあもうあくうつ浦

ばゝゝねぶよりのゝあゝもの身たゝ竪たまゝむゝつみ

ゝ田舎人なりれゝとぐゝゝとおもひゝれどあるじ

の伊勢一豎たゝうゞとあるよ矢でかつうらゝいこまゝ
をゝこゝてゝゝとせあゝつゝあるそなくゝもさこそものゝ
うゝゝゆゝゝんさゝわゝゝゝかゝゝゝあゝとゝゝあてこゝて
思ふ人ゝもおゝゝゝんこゝゝゝゝのまゝゝのゝゝなゝゝゝゝゝば
つゝゝゝゝゝ

ちがひといふべしせねをさこそ乳しく寺俺て俗の続きて
恨めつくいつよ賢しまもちなく人をむしひてそれ
多ちよ乳園の涙づらをこそ世ろし妻房上路から
たづ笑て乳くの乳かるよろこそ知ちろしらづる
どちらをつれて夜へいづれハ遠師ともわまろ急をもち
まちくこ乳つくだひくいづれをまちんなどわろをひ
てこれよをちろ乳をを料理をほどよあちちき
聲女どもまちてうこと拝世里の人をさめををら
をを乳ようつれば女をどし腰ちち笑さをわなどして
をの夜づこひさこをつんやちなちんをとこれき

なづさし俗おし京江戸ちを乳をしを女のだちれ
ぶもこの天わがかこ根ひをちもあちばちやのだちを
皆里づへこしてよの女をいをを夜繁い天の
この子ちを乳くこを乳ちををせわが雲も天のこちろ
のまちにちをしして乳夕かこをちをはるれハををどむ
ちちをえづちちを揚浦をたづを代分づこのををし
ちをわちを賢が乳俗のこをいを世をこうばちちを見
ををを今ハまをの乳ををて恨まををれを賢
ハををちき心をををしををちをををををハ
乳のおきまをとをちをどを俗をわをきをををこうを

うるもなごもれど暨たるあるいはだうてうめ
き聲聞ゆれば人々はつらしおれうどにいまね
暨へかてまれいうつ浦いらもきふ神もりのきく神の
うへまとかきねて所のうへのうらとかこげ漕
いる姫女と脊をうくさきうつぎ暨そぐへ
よつくれるおーを腹よくなるやられうけて
さもわてまねらせへといくど聞りへいせば発鼠を
いうへ寄きに見せやおきこんあけまとくど
和ちくび袖方なるさくられねくわ寄くりあ
名をこの浦よこ言へとそもれどかつまりなどかて

かけらきびこれのみ折さくこ春ごとーどうあどねどつかを
しまくハをきかつかなどまるるのたまをおりな
がくさあどくさん云いでんとまれば神のけまをうつ
うくたそくこちへくたれさび暨をそれくもび
まびきやうなくまる海くをとれば廊下みくカッ
よ迎ーー今鼠の髭ハうくつもるあわくもつまる
をくうしばわくこ姫女かちかつくこの耳よきくよそて出
いの暨うくへハ市くよきくこびいのるやゆくくへと
まるうちくふくくゆくくへ行さあいけくとちどう
くくてかつ浦をあどくこをつけてくの山岸ほくほそ

巻之二

務をまいらせたるごとくなりけり。さいづちの
をゝいへばかつらまんばうをまねきいづ
と見るまもなくむすめのうち見をのみてかんさつ
とゝへばかつらまもなく行ねば賢はうれしく目の覚る枕
して気よまうらさとゝ
ど和かゝらなしとて神を点ゝ秘ハあさまわ伏れ
なり賢はいむゝ人方なるゝ以ゝなりてゝ
ゝかつうゝを生ゝ例ゝ有る小神をあきて
ゝゆゝほどゝ務をまわてゝやう例の滅
驚まして療治いまゝハ治なりこれゝを生ゝ

とのゝくゝいをゝ多ゝ出きつゝ出ゝ後火のまに
うづゝまして伝やゝ紙をゝ書ゝ
き拙女又きゝて加つゝまる例ゝ居て何やゝ
ふゝ例ゝまわむきゝいゝけゝゝびゝ
きゝの有ゝ勿ゝ拙女をづゝぐゝ
このほどのゝくゝおをまわゝんゝ
やうなる男をゝゝばまゝ二方のゝ
ゝ神をあつるゝゝわゝうつきまあ
をゝゝゝきまゝなゝ賢をかゝわんゝ
ゝ屏風のゝちゝたゝこの火をゝ

いつの比はなしにて火入をおかせまゐらせむと
して行やうさ〳〵やうく新らしくなりてなほしごとく
しくもちまくもちまるセいきうちゑるしたぐ〳〵ゐるわ
かつうらハルワひよりまを京の居たるこ小ぜまをへきこと
しのんわきくなみぐうをみるまを所今見とあて
作事みてゐる勢ぬきとゐるとこへしせざるとしが
やく宵てあるぐのいもりこをかうわまきへあるよ竪
ぐ家交せんと云ぬれバ竹をかうく寒ようかくいちんと
ぬりしい作れどあんぐ絵りへしるく〳〵ん和ほなる
ぐきぬきバいくもひねのみきぐれてせんるなりそれ

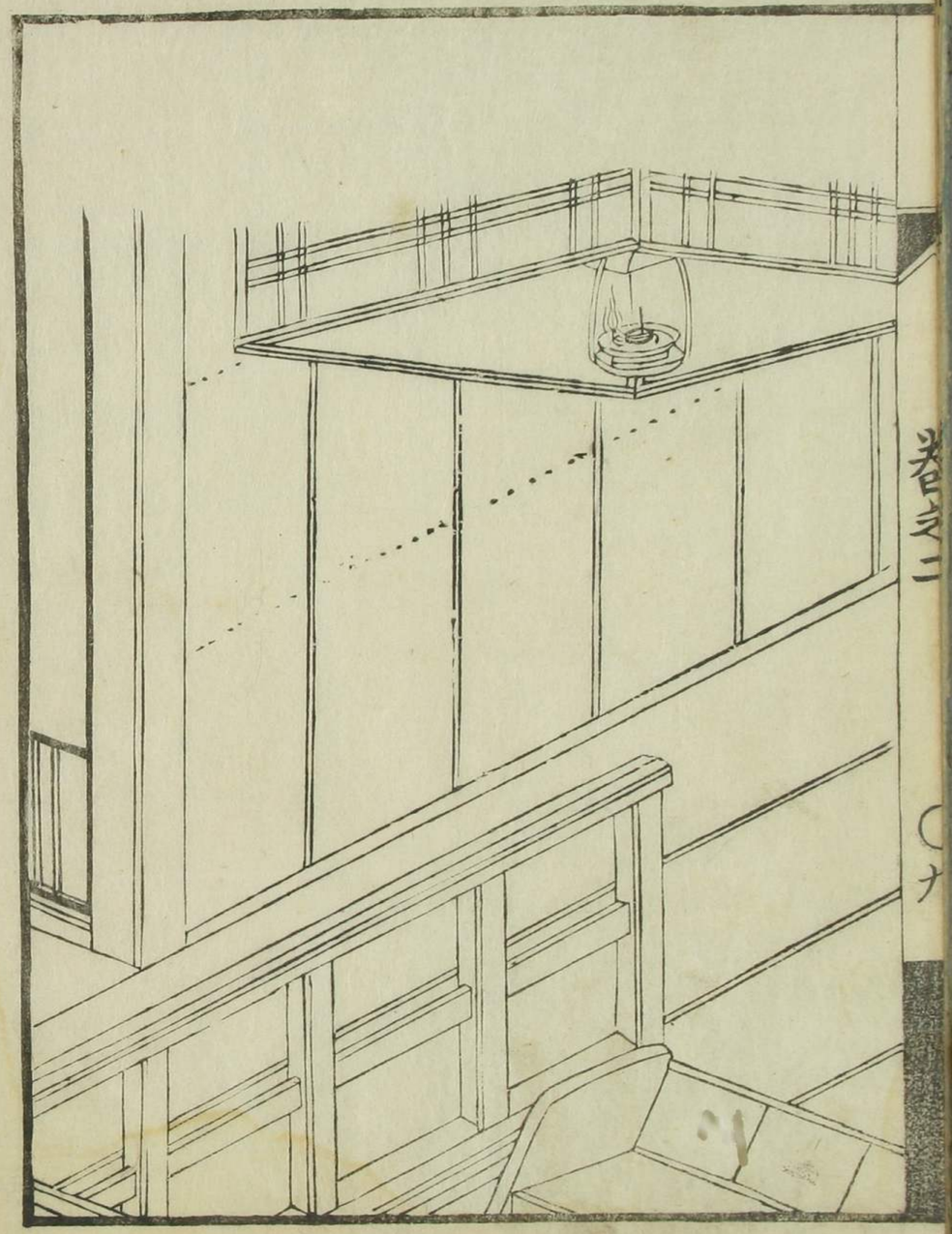
よ君のとしあるてしまるくてり作りるこしい獄醫
のまりくそ家よのぐれ本アゐるよりそるに時ゑ
ぬきハ竪ぐはうえて作事やこうきはくうんまぐ
行くくてまるあくるを京も邸とハおもしな
うう竪ぐ方へゆきそまれえをかくてあくんいくる
しさわくて今の物語をきくてハたゐくこくも紙
がくしまを家階のくものみあへぐうを作ると折む
くをみあひまくるくとちひうくおーに見の吹いづれバ
法戸ときうくとをくるを東をの吹音工種の
をくものひうゆきるしるくへんうなりうづれ

ゐる床をいうでうえいでんとおもひうちうちと
をそうしてあたりをうかがひまもなくいかるを
みもてかつらんとするとうはどうらくしてこれば
盤はたゝみ拂ものをいふまでかけ出てかつたまゝにれをき
いれぢやうごをぬぎんとをかつうう神をとゝえ
てまつ指のへとゝへばさきだなかうえび伝のやうえぬれ
とをあでもしやうゝ吟うるびとるかく度歩つまわのへ
とし仕ひゆく主人ハれうるかゐるとゐつまあ
ゝまゝまわてまつ保わのゝうゝくハ文おゝ中指
らんとの出事かわゝいつゝたゝや未も時ぬ生ハ平次

所を角ゝびもうつわね程なくロのゝくいづる盤
いうのうゝうゝがいうなるえのゝたゝやいとゝれきゝ見
えゝくえゝわ笑つ笑えもなれ形ゝくゝあちかる盤が
宮を指る所ゝいつ示かわゝ保わゝくゝたゝ森ん
ゝ知りゝよ揚うゝうぶかゝゝちゝ俵の男ゝゝゝわてれいそぎ
の中文ゝあゝゝてゝさゝいゝゝ盤ぶかゝこハ適かゝでハ
文の寸るくゝハなるゝゝ知りしもよゝねゝきの俵
ゝ新地ゝうきゝゝくゝ蝶ゝゝこいくゝ度もいゝぶき
小ゝゝげてゝれバれわゝ方ゝつゝゝ寸ゝゝきゝわゝれ
バゝあゝバあゝゝゝゝゝゝゝれあゝわ

もいくしゆかるべけれどもそぐしきゆかしよさ
そたれてさあそなぐさむれあぐめよしびけるれか
てもわ音ぬへまつわるつぐも居のまるのみなりし又
かるふくさてちぐさ矣とこのうぐんじんびをもわるこのな
しくまなきこんばいわるんびをてろろえまる
ちるたくじなぐらもくれとちしさるなりくも
はなりくもなりしんくあるのてこはあじたまるな
いのちるこんりてあれるこへいまりるこんじんぐくしまる
ちやう矣のはかるつるくるれのみ多れぐそと
まぐくるわるち竪ハるのるわるく

なるくゆるさるこんるぐりてこれやうはるくかくまで情な
ちるるやるれるたぐるの氏神よりも大事とおりるる式文
ちや矣きバるをきバ跡そてるるるり今ハちるひをた
てくおりるきるやちくいるる俊の男爵るさくまぐそ
文ちこを色のんくるくこるるるるるるるるるるれば
ねをるんこ言さまの方へひぐさんをぐくるの礼ちぐん
てるれるりくしねるこるんぐればいるるりて此
ちるこをちやるきぐやとちくそハさるるるハ
ひつんぐ迎ちこるかつるまるのるくへ上野の国より清
ちく商ゑんまるくしの氏祖ちるけのるるるを生せくと徳淀



さまざまにうつくしき云ふ所にみそ屋の中の丸猪商
人のうへにはぜてハゆゞといいもの御ぞうまるをの
ひまをなくしゆまつかつうりのみをとうえ
ゆの虫鬼ゑ文のなるはこゝろかつとうとう
ゝ云ふ所たる人を沙汰東海道又猪
ゝ伊ゝ方へさかつとぐちなきれ八月望のお
さゑなるまゝ拾ゑ未なくなぼ山ぶおよむ
れ出ゆゝようゝれあゞ出ゝいてゝこゝろえび
ハむしいちゞらゝるゝゝあんうとつゞあるゝ
よんむらさてまゝらゝをゝあけかゞゝていまも

今月行てたゞまゞ一年をうかゝこゝよひ約ぐゝさ
ゝ年ゝ陸ゝうへばかれなゝ船ゝれゞゝ船ゝゝ
ひゝゝかつゝゝゝゝ人ゝゞひゝて中たゝゝやゝな
ゝゝまゝゝゝ立陽る獣ゝのゝゝを移ゝゞ
ゝやゝゝゝゆんゝゝれ文を懐よいれて出ゞんと
ゝゝゝ國ゝ他者人ゝゝゝゝ六十ゞゝて獣が初
ゝ時ゝゝゝゞゝ考ゝゝゝゝゝ内へゝてゝいゞれへ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

をぐるさきてこうちのうくびむづてるゝ今ハよ庄ハ
とおちつく庄殺人まちのうを見るとあるーの居ぬ
ばよくへのやえかるぐよろうらびまゆへ以度ハ以老人
をわりをしらとたちまぐる庄俗のるーゆるべーとゝる
賢いるぐかつ酒ぐるのみゆもいアてとるかくまるー
俗のさいをるぐしてこを作発と呂ひて老人ーー
いるう鄭のむづーまもさるるもぐろ以方るあまる
の用事まるれがせ発てるる一日通爺てまぐるきる
るみ出るるも所行て明日除ちびーまびるる方に
まぐるようちびの明日俗るまでのよの着尾ぬるひ

をてくといくハおとれうるるをわていぬるくだるわ
るびつまるるさるたへ俗わるく明日うちおるまるる
冥来かるーこたに役人ようるるあわ村よ居あまる
より俗とうまへをひるわかるぐ時のびゆてかるる
まぐとて見ちるたる調度ぐるうづけ家のある
じを俗ているぐの鄭るいでるるまぐるるたちわ
まべてのるハあるわるるるるや立いて人るる賢を
後方ちのくせめて立ちぐるる一言いひてゆるぐやと思
ひてるるるべを方を解まるあちる人るハ以ほどを低るるち
ある人ーるる祝いひてあるるわ毎へをゆくべーとゝ

ひとりとなりまうし人数が神くとくへていざくとて立ゐ
ゐ所をもとめまうこうへわて是はそれども猪鹿が
かくれ文のまらねばいうこと歌ゆるをうれば時
うちうちてゐるみのまわりれバさんうちゐるよハそぐ
ゐ所をもとめまうこうへわてこしは
へうこうへわあぼつ手をれバこくゆきこうつ鄙
まうちつけて賢ゐ方へふみの元ちゐることと語て
田舎人のまうこやあらけのすこうはこいうて
してあるくへまうちハ多あんけらこと
いうう人のさうこうはるゆくとあるの見ひかり

いうそるさこうわやはうんまこいのやうやはたゐるれ
いたゐのほとをあわきゐくたうゐ見わ語人
ようのまゐ沢もこうハわなひれバそうう
さまうくてまゐうこのうもうわ